



中国がわかるシリーズ 9 秦から漢へ

ライフネット生命株式会社 社長 出口 治明

始皇帝は、大帝国のグランド・デザイナーとしては、傑出した能力を持っていました。始皇帝がデザインした国家の枠組みは、その後 2000 年にわたって踏襲されることとなります。秦の名は、英語のCHINAとして、現在にも受け継がれています。秦の国力の充実ぶりは、例えば、始皇帝陵から発掘された活力漲る等身大の兵馬俑が如実に物語っています（[西]漢の兵馬俑は、遥かに小型）。商の時代の人身御供は、兵馬俑にその席を譲ったのです。

中国を統一した始皇帝は、休む間もなく、全国の巡行に出発しました（BC220、219、218、215、210の5回）。BC219年、五岳のひとつ、泰山（最強のライバル、斉の儀礼の中心地）では、封禪の祭（皇帝就任を天地に報告、斉の祭祀の継承を告げました）を行い、不老不死の仙薬を求めて、方士、徐市（徐福）を東海に派遣しました。おそらく、徐市が始皇帝をたぶらかしたのですが、徐市の伝承はわが国にも残されています（方士に不信感を抱いた始皇帝は、後に「坑儒」を行って憂さを晴らしました。何も儒者だけが弾圧の対象になった訳ではありません）。

ところで、北方の草原地帯では、戦国時代に遊牧国家が成立していました。当初は、月氏を先頭に、東胡、匈奴の3強が競っていましたが、戦国末期から、匈奴（テュルク系ともモンゴル系とも言われています）が強盛となりつつあったのです（匈奴は、国家名です。なお、スキタイと匈奴の類似性が指摘されていますが、それぞれの遺跡から発掘された短剣などは瓜2つです）。匈奴は、族長会議（龍会、祀天儀礼と共に行われました）でリーダーを選出し、10進法（10人長、100人長、1,000人長など）を単位とした統治機構（＝軍事組織）を有し、左翼、中央、右翼に軍団を展開していました。この遊牧国家の基本的な枠組みは、後のモンゴルに至るまで脈々と受け継がれることとなります。

北方遊牧民の軍事力は傑出していましたので、趙の武霊王（BC325～299）は、対抗上、胡服騎射という彼等の戦法を取り入れました（即ち、戦闘に便利なズボンを採用した遊牧民の戦闘法）。また、侵犯を受けた燕や趙では、国境地帯に、版築（黄土をつき固める技法）で長城を築いていましたが、蒙恬は、匈奴をオルドスから追い払い（BC214）、これらの長城を繋いで、万里の長城を築き上げました（秦の万里の長城は、明代に築かれた現存する万里の長城より、遥かに北寄りに位置しています。秦の匈奴に対する強盛振りが窺えます）。首都、咸陽では、阿房宮と呼ばれる空前の大宮殿の造営が開始され（BC212）、始皇帝陵の建設を含めたこれらの大土木工事には多くの



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

人民が徴用されました。匈奴を北に追い払った始皇帝は、直ちに目を南方に転じ、百越と呼ばれる山岳の民との戦争を開始しました(BC214)。国家統一の次は、確かに、周囲の蛮族を従える番ではありましたが、民衆は、厳格な法治主義と休む間もない戦争や大工事に疲弊の度を高めていったのです。対蛮族戦争(匈奴、百越)とそれに伴う大土木工事(万里の長城や、直道と呼ばれた軍用道路)は、秦滅亡の遠因となるでしょう(苛酷な長城修築事業の中から「孟姜女伝説」が生まれました。これは、新婚の夫を徴発され、遠路を厭わず捜し求める妻の物語であって、春秋時代の伝承を下敷きにしています。ようやく見つけた夫は骨となっており、妻は渤海に身を投げました)。ただし、始皇帝の傑出した手綱捌きにより、始皇帝の存命中は、秦帝国は、ビクともしませんでした。なお、始皇帝の陵墓は、人類史上、空前の大きさを誇っています。

「万里の長城」

始皇帝が繋いだ万里の長城は、西漢にも引き継がれました。武帝は、長城を西方に延伸し、西漢の長城は、史上最長を記録しました。ただし、東漢の時代になると匈奴との関係が融和に向かったため、長城の必要性は薄らぎました。北方から興った拓跋国家は、北魏の時代には、長城を活用しましたが(対柔然、突厥)、隋・唐は、長城の必要性をあまり認めませんでした。これは、大元ウルスや清も同様です。また、宋は、せん(さんずい+宣)淵システムによって、やはり、長城に頼ることがありませんでした。長城を必要としたのは、強大な北方遊牧民と対峙せざるを得なかった金(対モンゴル)や明(対女直)の時代でした。長城が必要とされた時代は、長い中国の歴史の中では、それほど大きなウエイトを占めていたわけではありません。

BC210年、始皇帝が巡行中に死去しますと、側近の宦官、趙高は李斯と謀って、暗愚な胡亥を2世皇帝に立て、北方を固めていた英明な長子、扶蘇を蒙恬と共に自殺に追いやりました(なお、扶蘇や胡亥の生母、皇后の名は全く残されていません)。趙高は、胡亥の前で、鹿を馬と言いつくめ(ここから、馬鹿という言葉が生まれたという説もあります)専横を専らにしました。李斯も刑死しました。極めて高い能力を持っていた始皇帝が、生まれて間もない大帝國を、10年以上もフル稼働させていた咎が現れたのでしょう。BC209年、陳勝・呉広の農民反乱が起こりました。陳勝は「王侯将相いづくんぞ種あらんや」(誰でも頭位に昇るチャンスがある)「燕雀いづくんぞ鴻鵠の志を知らんや」(小人物には大望が理解できない)という名言を残しましたが、秦将、章邯に敗れました。しかし、この反乱をきっかけに、楚の国(江蘇省)から、項羽と劉邦が台頭し、BC206年、秦はわずか15年で滅亡してしまいました。最初は、項羽が覇権を握りましたが(西楚の霸王。18王による連合国家)、わずか4年で、四面楚歌の故事で有名な垓下の戦いに敗れ(ハンニバルがザマの戦いに敗れたのと同様)、BC202年、劉邦が、漢を建国しました。劉邦は、下層の生まれであり、陳勝の夢は、劉邦によって実現されたのです。項羽は、楚の將軍の家系に生まれ、戦には滅法強かったことが知られています。一方の劉邦は、楚の農民の出身であり、教養はありませんでしたが、人を惹きつける不思議な魅力を持っていました。劉邦の周囲には、蕭何、張良、韓信(天下三分の計



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

や背水の陣で有名。蕭何が国士無双と評しました)などの英傑が集まったのです(但し、漢の建国後、韓信など功臣は肅清されました)。

なお、秦滅亡後、嶺南の3郡(桂林、南海、象)を、秦の地方官、趙佗が纏めて南越を興しました(BC203年)。都は番禺(広州)で、ベトナム北部までを領域としました。先見の明のある始皇帝は、当時の先進国であったインドとの海上貿易の中心地、北ベトナムを支配するために、嶺南3郡を置いたのです。劉邦に南進する余裕はなく、南越は独立国家として自立しました。